

グアテマラ共和国におけるハリケーン災害現状報告

平成18年1月13日

開発と権利のための行動センター

栗田 桂子

1. 派遣日程と目的

派遣日程：平成17年12月13日～12月31日

派遣目的：10月初めにグアテマラ共和国にて豪雨による災害をもたらしたハリケーン・スタンの被害状況について、被災後3ヶ月を経た現地の状況把握を行い、必要とされている支援ニーズを調査する。帰国後、日本国内において、報告会等を通じた災害支援への呼びかけ及び各種助成金申請などの支援要請活動を行う。

2. 訪問被災地

サン・マルコス県（シビナル市、エル・ロデオ市、コミタンシーヨ市）

平成17年12月14日～19日

ソロラ県サンティアゴ・アティトラン市

平成17年12月20日～24日、26日～28日

3. 被災地の状況

1) サン・マルコス県

サン・マルコス県は中米最高峰であるタフムルコ火山（4,200m）を筆頭に、太平洋沿岸部まで広がる標高差の激しい県である。今回被災状況を把握するに当たっては、高原部のシビナル市・コミタンシーヨ市と、高原部と海岸部のちょうど中間に位置するエル・ロデオ市の3つの地域を訪れた。

シビナル市

シビナル市はサン・マルコス県の西北部に位置する市で、県都のサン・マルコス市からバスで3～4時間ほどかかるが、そのアクセス道が大きな被害を受けた。3ヶ月後の今回の訪問ではほとんどが復旧していたが、何キロにもわたって道路法面が崩壊しており、ハリケーンの凄まじさを見せつけている。

シビナル市は背後に山を背負う形で町が広がっており（写真参照）、その背後の山へ上がると、土砂崩れのあとがいくつも見られた。また、尾根にはタカナ火山へ通じる道路があ



シビナル市山中の亀裂

撮影：2005.12.17 栗田

るのだが、数十メートルおきに法面が崩壊しており、現在も不通のままである。また、道沿いや尾根沿いには地面に大きな亀裂が幾筋も走っており、次の雨期には確実に新たな崩壊が起きるものと思われる。この周辺では地域住民によって薪炭材採取による森林の伐採が行われており、この地域では樹木がまばらになっていることが災害をより大きくしたと考えられる。道路の法面崩壊については、切削法面について特に何らかの土木施工を施しているわけではなく、切り崩したそのままになっているため、豪雨によって崩壊したものと思われる。



シビナル市全景

撮影：2005.12.17 栗田

また、集落内では谷沿いに大量の土砂を含んだ水が流れ込み、橋や畑、一部家屋を押し流した。乾期に入り水量が減った川は岩と砂が堆積する荒野へと変貌していた。水源地の崩壊によってわき出た水が土砂の下を流れ、伏流水化しているところが多いとのことで、また山から引いている水道のパイプラインも至る所で断絶しており、乾燥が進むこれからは生活用水の確保にも不安がある。



シビナル市内 壊れた橋
撮影：2005.10.28 石川

エル・ロデオ市

エル・ロデオ市は県都サン・マルコス市から西へ太平洋へ向かう道路の途中にある市である。道路は川の西側にそって作られているが、エル・ロデオ市はその川を渡った対岸に位置している。今回のハリケーン災害ではこの川が大氾濫し、川幅が数百メートルに拡大し、その後水が引いて岩と砂が堆積する荒野と化していた。とりえず重機が入り、川底を掘って川の流れの位置を元に戻し、仮設橋を設置、あとは車の通る部分だけ土砂をならして通行している。つまり、次の雨期に川が増水すればたちまち陸の孤島と化すわけである。



サン・ラファエル市郊外
(エル・ロデオ市隣)
撮影：2005.10.28 石川

ハリケーン直後は数十日にわたって通行が遮断され、町の中心部は被災を免れたものの、物価が非常に上がり、貧しい住民たちの生活をより圧迫した。現在もそのときの出費が重くのしかかっているとのことであった。

エル・ロデオ市はコーヒーの大農園が広がる地域で、農園で働く貧しい農民が多く、今回の災害で収穫を失ったコーヒー農園では仕事も少なかったと思われ、出費が多く収入の少なかった状況の中で、今後より厳しい生活を強いられるだろう。

コミタンシーヨ市

コミタンシーヨ市はサン・マルコス市の東北部に位置する。今回は市の中心部ではなく、タルテミッチ地区を訪問した。タルテミッチ地区は両側を山に囲まれた谷に中心を置いており、平野が少ないことから川岸の土地を畑として利用していた。今回のハリケーンでは家屋に被害を受けた人は少ないが、多くの人が畑、もしくは畑の収穫を失っており、今後の生活の維持に不安を抱えていた。



コミタンシーヨの女性たち
撮影：2005.12.19 栗田

今回はある女性グループを訪問したが、初めは和やかな雰囲気だったものの、ある年配の女性がハリケーン災害について語り出すと、皆が泣きながら口々に今後の生活について不安を訴え、表面上は落ち着いたかに見えるようでも、実は精神的に大きな不安を抱えていることがよくわかった。

2) ソロラ県サンティアゴ・アティトラン市

ソロラ県は今回のハリケーンによって全県的に大きな被害を受けた地域である。その中でもサンティアゴ・アティトラン市はグアテマラ国内でもっとも大きな被害を受けた地域である。

特にその中でもパナバフ地区では10月5日未明、背後のトリマン火山(3,158m)山頂で起こった崩壊が土石流となって地区中心部を襲い、あっという間に多いところでは10m以上もの土砂に埋まってしまった。600人以上が生き埋めになったとされる現場を訪れたが、広々と広がる平らな土の平地で、その下にたくさんの家や人が埋まっているとは信じがたいほど、きれいに埋まってしまっていた。その他、パナバフに隣接するツァンチャフ地区やその他の地区でも土砂災害が相次ぎ、亡くなった人や家屋を失った人たちがたくさんいる。



土砂に完全に埋まってしまったパナバフの中心部

(右の写真の建物は小学校の校舎)

撮影：2005.12.22 栗田



被災直後のパナバフの様子

撮影：2005.10.13 CONIC

市役所における体制

市役所内の各担当者

- ・ 水関係 Juan Tzina
- ・ 農業、環境関係 Chichon, Manuel
- ・ 土地、住居関係 Diego Chiviliu
- ・ 組織関係 Elena
- ・ 都市化計画 Nicalas



トリマン火山の崩壊

撮影：2005.12.21 栗田

市役所はキャパシティが追いつかないのか、データ収集、計画、地域住民組織やNGO他ドナーなどとの調整等が滞っている状態である。緊急委員会(Comite de Emergencia)が機能していた時には委員会を通して全体の調整が行われていたが、これが解体したあとには調整を担う機関がない状況が続いている。緊急委員会がなくなった原因として、政府機関等との合意を緊急委員会を無視して市役所が勝手に決め始め、委員会の存在意義が不明確になったとする反市役所派も存在している。これらの反市役所派によるNGO(ADECAP、

詳細後述)も立ち上がっており、現在この団体と市役所との関係は良くない。

様々なタイプの住民組織や、ハリケーン後の支援を行う中で新しいイニシアティブも動き始めている。外部からくる NGO やドナーも、各グループと直接コンタクトを取っている状態で、誰も全体を把握できていないし、各組織は情報を共有したがない。今後 COMUDE (Concejo Municipal de Desarrollo : 市開発委員会)がこの役割を果たさなければならないが、現状では機能していない。地域でのスムーズな調整と協力体制の形成のためには、COMUDE を強化する必要があるだろう。

避難所について

家を失った人々は学校などの施設を利用した避難所に集まって生活している。現在ツァンチャフ地区のもと畑であったところに仮設住宅が建てられており、約260世帯の住民が暮らしている。しかしそれもまだ十分ではなく、未だ学校等で暮らしている住民のためにさらに150世帯分の仮設住宅建設が現在も進められている。それと平行してきちんとした住宅の建設も予定(政府発表では5月完成予定となっている)されているが、まだ始まっていない。2005年12月現在、住宅を必要としている住民は442世帯にのぼる。

仮設住宅に入っている家族の台帳によると、総家族数は265家族、うち寡婦54人、寡夫10人、孤児の女の子2人、男の子1人となっている。

避難所では委員会を作ってコントロールしていく予定だが、現状では機能していない。



パナバフの仮設住宅の様子 撮影：2005.12.21 栗田

【避難所関係のその他の情報】

市役所でのヒアリングから

- ・ エストゥーファと食料の援助が入っている。
- ・ 男性は薪を集めたり、畑が無事だった人は畑仕事に行ったりしている。
- ・ 仮設住宅の建設に20人の男性を雇っている。給料は市役所が支払っている。(FONAPAZ は材料費のみ負担)
- ・ 女性は家事全般をしている。
- ・ できるだけ働かないことに慣れないようにしたいと思っている。

避難所の委員会のヒアリングから

- 不足しているのは、トイレ、水、水道管、街頭、生ゴミ用の穴（肥料として利用する予定）、医薬品、クリニック、ベッドなど。
- また、今後正式な住居が建設される予定だが、再び土石流が来るのではないか心配なので、頑丈な防壁を作りたいと思っている。
- 内戦による母子家庭の世帯も多く、女性にもできる民芸品による収入を増やしたい。支援してほしいものは例えばビーズ細工をするための小さな机など。腰織機は1セット50ケツアルぐらい、足踏み式織機は木材だけで300～350ケツアル必要である。ウィピル1枚織るのに糸代は200ケツアルぐらい。問題は、仮設住宅では織るためのスペースがないことと、製品をより良い値で買ってくれる市場がないことである。

CONIC (La Coordinadora Nacional Indigena y Campecina: 農民先住民全国調整委員会) の保健プロモーター (支援: OXFAM) のヒアリングから

- コーディネーター Diego (de Tzanchaj)
 - 物品管理 Micaela
 - 水関係 Diego
 - 保健衛生 (トイレ環境) Concepcion Esquina
 - 子どもたちとの活動 Ana Maria
 - ゴミ関係 Juan
-
- だいたい1人あたり50世帯ぐらいを担当している。住宅の周りや中をきれいに保つように指導したり、世帯構成を調査したりしている。世帯調査はまだ全部終わっていない。
 - 家の壁が刃物さえあればすぐに入られてしまうので、みんな不安に思っている。実際1つの家は強盗に入られた。
 - 子どもたちの具合が悪くても薬がない。
 - ピラや台所が足りず、一人の人が占領してしまうなどの問題も起こっている。(現在214家族に48コの洗い場がある。)
 - ゴミの収集が追いつかず、困っている。
 - IMAP (Instituto Mesoamericano Permacultura) が、仮設住宅周辺で家庭菜園の支援を予定しており、教会から寄付される土地の境界線が確定すれば、活動を始める。有機ゴミを分別し、肥料として利用する予定になっている。

OXFAMの担当者とのヒアリングから

- OXFAMはトイレ、水の確保、シャワー、水道の設置を主にしている。あと160世帯が仮設住宅入り待ちで、あと43カ所トイレを設置予定。とりあえず3月までの支援と

なっている。(その後のフォローについては1月に議論する予定で、現在 CONIC からの提案待ちである。)

- 食糧確保については、OXFAM の Nicolas が担当している。
- Save the Children が食糧援助を継続する可能性あり。
- IMAP が家庭菜園を支援。

農業について

市役所の担当者によると、農業の被害額は3~5万ケツアル相当と思われる。主な被害は、湖岸の野菜やフリホール、ミラドール周辺で約200家族が作っているコーヒー、バナナ、パカヤ、マシヤンの葉である。

これらの被害に対する支援としては、種、道具、肥料を提供するということがひとつ挙げられる。他、市役所の担当者は研修(経済を立て直すための講習など、例えば農業の専門家に来てもらい、その土地に適した作物を指導してもらおうなど)をしたいと考えているようだが、こちらからすると実際にそれが必要なかどうかは疑問である。ミラドールなどの傾斜地でも作れる作物は限られているし、トウモロコシなども長年の経験から品種を選定しており、外部から来た専門家より農民の方がよく知っていると思われるからである。

被害状況の把握については、農地が被害にあった人に市役所まで届け出るように呼びかけて、現在130人ほどが報告に来ているそうだが、来ていない人がほとんどで、調査ができていない。1月からは訪問するなどの方法を考えるという。

自分の農地が被害を受けた農民以外にも、人の畑や農園での賃労働をしてきた多くの人も仕事を失っている。まずは土地と住居の確保、次に農業関係や民芸品関係など収入につながる部分を何とかしなければいけないが、どれだけの人がどのような被害を受けたかなどのデータがどこにもないため、支援する側も難しい状況である。

実際にサンティアゴの農民組織(約280人)のメンバーと、ミラドール(市の所有地であるが、農民に貸している)の農地被害の状況を見に行ったが、大規模に崩れたところも多く、農作物に大きな被害が出ている。作物は主にコーヒー、マシヤン(タマルなどを包む葉)、パカヤの3つで、スチテベケス県境へ向かう急傾斜地で栽培している。崩れ方を見る限り、土止めをしないと新たに作物を栽培するのは困難な様子であった。

CONIC の代表であるペドロ・エスキーナとも話をする機会があり、彼によると、種が必要な野菜は主にニンジン、キャベツ、トマト、落花生、空豆などで、トウモロコシやフリホールなどの伝統作物はどれもその土地にあった品種を栽培しているため、種の確保は地域内の農民同士で行うのが最も良いとのことであった。他に、肥料に関しては徐々に有



市場で売られているマシヤンの葉

撮影：2005.12.26 栗田



崩壊地が多数見える湖岸

撮影 2005.12.22 栗田

機肥料（トウモロコシの茎を燃やさない、生ゴミなど）の使用が進んでいるが、まだ化学肥料を必要としている人が多いこと、トウモロコシ、フリホーレス、塩、砂糖の基本的な4つの食料でいいので、次の収穫まで援助がほしいなどの提案があった。特にマセカ（市販の配合済みトルティーヤ粉）は濡れたり湿気ったりして問題が多いことや、缶詰のフリホーレスも食べ慣れない人が多いことをふまえ、食料援助を考えてほしいとのことであった。

健康面について

市役所での話によると、避難所からのゴミの量がかかなりあり収集が追いつかない状況で、現在 HIVOS (Humanistisch Instituutvoor Ontwikkelingssamenwerking [オランダ語] : 開発途上国と協力する人道的団体) から支援を受けているが、この支援は1月までで終了の予定であるとのことであった。一方、避難所ではゴミ回収の回数が減らされているため、衛生上良くない状態になりつつあるとの批判を聞いた。また、市役所側の話として、住民が協力してくれないので、5つの各地区に一人ずつ人を雇って、道や家庭のゴミを集めたいとのことであったが、ゴミ問題の解決については、まず排出されるゴミの量を減らす運動が先決であるように思われた。

植林について

市役所によると、トリマン火山の崩壊地に植林していく予定にしているが、来年はとりあえず種の確保だけを考えているとのこと、面積については来年測量する予定となっている。樹種は pino (マツ) cipres (メキシコイトスギ) illamo (ハンノキ) とのことであった。ただ、崩壊斜面は土が移動しやすい状況となっており、ただ単に崩壊面を測量するだけでなく、実際に植林が可能な土地がどれだけあるのかをしっかりと見極める必要がある。

その他の支援・援助について

ポサーダ（サンティアゴの高級レストラン兼ホテル）のオーナーのアメリカ人夫婦が被災者の支援をしていて、そこを通して OXFAM から資金を得、500人の女性に腰織機とウィピル2着分の糸を援助した。

OXFAM はサンティアゴとは別にサンタ・カタリーナ・イシュタワカンでも被災した400世帯を支援している。イシュタワカンは住民が組織化されていないので難しい状況とのことであった。

地元組織による援助

ADECAP (Asociacion para el Desarrollo Comunitario de Canton Panabaj : パナバフ地区共同体開発協会)

代表：Francisco Coche Pablo

ADECAP はコミュニティ組織として立ち上げ、メンバーはパナバフ住民全員 600-650 家族の内の 400 名ぐらいとのこと。避難所アルファの横の土地に民芸品を作って売ったり、食堂をしたり、エコツアーの案内をする建物（Centro Comunitario）を建設予定で、現在 5 名の男性を雇って建設中、場所はカトリック教会から提供してもらったとのことであった。ほか、ADECAP の Comision de Auditoria Social（12 人）と市役所及び FONAPAZ で、被災者センサスを実施中で、今週中には終了予定とのことであった。

【活動分野】

1. Fortalecimiento Institucional
2. Reactivacion Economica y Social
3. Segridad Alimentaria (huertos)
4. Participacion Ciudadana y Auditoria Social

ポサーダ（スーシー）

470 人の女性に腰織機とウィピル 2 着分の糸を、OXFAM の資金援助を得て支援した。すでにあと 100 人程度の支援を決定しているが、さらに 150 人程度が支援を必要としていると思われる。織機は 1 セット 30 ケツアル程度で、地元の家具職人に頼んでいる。糸と合わせてほしい 1 人あたり 16 ~ 20 ドルぐらいである。

民芸品の分野では、いくつかの組織がサンティアゴで動いている。皆が仲買人を通す低価格での取引ではなく、直売による収入増を望んでいるが、あまりにも同じような商品の生産量が多いので、なかなかすべてが売れるような市場開拓は難しいとのことであった。

ADISA（Asociacion de Padres y Amigos de Personas con Discapacidad de Santiago Atitlan：障害を持つ人の友・親の会）

代表：フランシスコとアルヘンティナーナ夫妻

ハリケーン後から被災者支援をしている。最初は服や靴などを提供し、そのあと市役所と政府の支援で農業道具を 100 人以上の農民に援助し、その後は 5 人 × 12 グループ、合計 60 人の農民にマイクロクレジットを使っでの支援を続けている。

女性に関しては、ヘドレさんというイギリス人のボランティアと一緒に 16 人 × 5 グループ、合計 80 人のビーズ細工をする女性のビーズを買い取って売る支援を行っている。これに関しては、よくグループに入れてくれと頼みにやってくる人がいるが、80 人以上は手に負えないので断っている。

被災者の状況

避難所で以前、石川智子さんが話を聞いたマリアさんを訪ねた。

彼女はすでに OXFAM からの腰織機や縦糸を整える台などを受け取っており、母親が織りの準備をしていた。マリアさんはエストーラを織るためのペダル式の織機を泥の中から掘り出した。

ハリケーン以前からこの織機を使っただけの布を首都にあるマヤハンスというところに売っているの、その仕事をしている。糸は毎月向こうが持ってくるので、その糸を使って織っている。マヤハンスはアメリカに商品を輸出している。マヤハンスと取引しているメンバーは26人で、うち13人が避難所にいる。毎月500ケツアル程度の収入がある。

一緒に織っている人は夫婦で織っていて、避難所にいるが、織機は2台とも兄弟からの借り物だそうである。

問題としては、避難所はせまくて織る場所がなく、小学校の教室を借りているが、1月からは使えないので困っているとのことであった。(他にも数名が学校の教室で織っている。)

織機については、親類のおじさんが避難所のすぐ近くで織機を作っており、本人の話によると、織機はサイズによるが1台約450~600ケツアルで、1台4~5日でできるそうである。

4. 今後の課題

グアテマラ全土に言えることであるが、被災状況が十分に把握されておらず、災害支援のための援助についても、どこに、誰が、何を、いつ、といった基本的な情報が集約されていないため、援助の偏りや重複といった問題が起きていると推測される。今回の調査でも、新たな支援を決定するための最低限の情報を得ることができず、苦労した。

こうした背景から現地へ行ってみないと状況が十分に伝わらない中、実際に訪れてみると被災状況は思った以上に深刻で、かつ広範囲にわたっており、現在行われている支援だけでは不十分であることも認識させられた。

特に農地における被害は深刻で、災害が起きる前でも生活の維持が困難であった農民にとって、今回のハリケーン災害が死活問題に直結していることは明らかである。3月頃までは、それでもわずかに残った農地の収穫物でなんとかしのいでいるが、4月以降はまったくめどが立たないという農民が多数存在すると思われる。

現地に行くまでは、そうした状況はある程度予測しており、9月以降の収穫期まで何とか生活を維持する食料援助が重要になってくるだろうと考えていた。実際にそれはその通



泥の中から掘り出した

マリアさんの織機とマリアさん

撮影:2005.12.23 栗田



被害にあったトウモロコシ畑

(サン・マルコス県)

撮影 2005.10.28 石川智子

りであったのだが、被害状況は予想以上に深刻で、4月以降、雨期に入った時点で作物を作れる状況にあるのかどうか（経済的な問題及び農地の被災状況）ですら非常に危ういと感じた。

また、斜面崩壊や河岸崩壊が起こった場所では、特に崩壊地対策が行われているわけではなく、堆積した土砂及び崩壊面は非常に不安定な状態のまま放置されている。幸いにもハリケーンが襲ってすぐに乾期に入ったため、現在は特に問題は生じていないが、今後再度雨期に入ったとき、ある程度まとまった降水量があれば再崩壊することは必至と思われる場所が無数にあり、今後の復興に大きな障害となる上、新たな大規模災害を引き起こす恐れもあり、非常に心配である。

課題は山積しており、どこから手をつけたらよいのかもわからないぐらいで、簡単な解決策などあるわけもないが、何もしないよりはできる部分からでもやっていかないことには何も改善しないのだということを忘れずに、今後とも長期的視点で災害復興に携わっていかねばいけないと強く感じた調査であった。